

森本 あんり

『異端の時代——正統のかたちを求めて』

(岩波新書、2018年、v+254頁)

有江 大介 (横浜国立大学)

本書は、誰もが知っているトランプ大統領の写真と話から始まっている。そのため、これは読みやすい本なのではという第一印象を読者は持つだろう。しかし、それは間違いである。本書の内容を理解するには広範な予備知識とそれを踏まえた理解力が読者に求められる。特に、ヨーロッパにおける教父時代から中世を中心としたキリスト教内部の正統・異端の論争についての理解が必要である。それが十分ないと、全体の議論の通奏低音となっているこの点への著者の整理やその妥当性を、一般の読者が判断するのは困難となろう。何しろ、わが国のキリスト教人口は総人口の0.8パーセント台でしかないのだから。

多くの教養ある日本人読者にとって、丸山真男の正統・異端論をあつかう第1章は何とかその内容を追うことはできるだろう。だが、それ以降終章までの本書のほとんどは、著者の専門とするアメリカ・キリスト教神学にもとづく、中世キリスト教から現代に至る「異端」とは何かという神学的議論がベースである。普通の日本人が初めて知るような知見の壁を越え、著者の見解に対峙できる読者がどれほどいるのか。近現代の宗教や政治の出来事との正統・異端の議論との関連が示されているにしても、そうはいないだろう。

もちろん、著者はそのことを承知で現代の読者に手を差し伸べ、登場する神学者や聖職者の主張や時代の思潮とそれらへの著者の見解を極力わかりやすく説明している。トランプ(序章)から始まり、丸山真男論(1章)、キリスト教神学の正統・異端論(2章-8章)、そして現代のポピュリズム(終章)へと至る。しかし、神学的な正統・異端論を基軸にしたことが著者に多くの苦勞を強いたのであろうことが推察される。実際、経済社会への

視点の稀薄な正統・異端論による丸山やポピュリズムの説明は、かなりレトリックの勝ったものになっている。また、本来それで説明されうるものなのかも含めて、その論理の一貫性、異端史の事実認定、現代の政治状況の評価について、必ずしも評者は著者に賛同していない。

とはいえ、本書に見るプロテスタント神学の立場からの、前著『反知性主義』(新潮選書、2015)に続く現代の状況への積極的アプローチは、我が国の読者には目新しいものであるだけでなく、宗教者による時代への発言として読者に新鮮な驚きを与えられると思われる。

以下、もう少し内容に即したコメントを紙幅の範囲で示しておこう。

丸山の「正統」理解への著者の批判は、第1章より第6章第4節「丸山の誤解」で明瞭になる。堀米庸三は『正統と異端』(中公新書、1964)で正統とは客観主義だと言っているがそれは間違いで、「正統は機構主義」で「教会を守らなきゃいけない、代々木を守らなきゃいけない」という丸山の発言を引用している(152頁)。つまり、堀米は共産党という現実の組織を守るのが「客観主義」であり、それを、「マルクス主義の純粹教理」(同)を守るという「主観主義」に対抗させていると見た丸山の理解を「誤解」と著者はみなす。堀米の客観主義とは、眼に見える教会と聖職者およびその制度を守ろうとする「事効論」の背後にある「神の恵みの客観性」(同)なのだと指摘する。この点を理解せず、共産党(代々木)という事実として存在する政治組織を守ろうとするのが客観主義と丸山が考えていたとしたら、それは「現代の陰謀論とさほど差のないもの」になってしまうと著者は言う(153頁)。なるほど、秘跡を承認するキ

リスト教信者の立場からはそうなるであろうし、妥当な丸山解釈になろう。しかし、これは信者以外の99パーセントを超える普通の日本人にはなかなか理解しがたい“説明”ではないか。信者ではない評者があえて解説すれば、堀米の言う正統としての「客観主義」とは、イエスによって聖別されたペテロ以降の教会による“秘跡”の超越的客観性のことになる。しかし、もしそうだとしたら、宗教改革前後の正統・異端論争への著者の神学的立場は、ドナティストへの折衷的評価に見るように(157-159頁)果たしてプロテスタントの枠内に収まるのだろうかという疑問が生じる。この秘跡理解は、使徒信条(Apostles' Creed)を超えてカトリックのトリエント公会議(1545-1563)で確定した使徒伝承(Apostolic Succession)に近接しているように見える。

もう一点は、第二次大戦後から1960年代までの日本の政治状況下、当時の知識人に対する共産党の影響の大きさというコンテクストの中で、丸山がなぜ著者が紹介するような形で正統と異端という主題を考えたのか、という問題である。もっとも、これは一人丸山だけではなく、当時の日本知識人・文化人の相当な部分に共通する問題として別途考察されるべき課題ではあろう。

次に指摘すべきは、「個人主義の宗教化」(189頁)に対応する、教会という制度の媒介なしに個人がその内面において直接に体験する「直接的な情熱」(193頁)に関する著者の系譜的解説についてである。著者は「仲介なしの直観」を「沈滞した教会を救う道」(204-205頁)と宣言したR.W.エマソン(1803-1882)を起点に、エマソンの講演に感動して現代まで続く「ギフォード講義」を1888年に創設したA.ギフォード(1820-1887)を経由し、1901年にこの講義を行ったW.ジェームズ(1842-1910)の『宗教的経験の諸相』(1902)に至る(ここではH.D.ソローには触れない)。しかし、この点では、同様な主張をしたと思われるドイツの自由主義神学者F.シュライエルマッハー(1768-1834)、エマソンの同時代人でオクスフォード運動の主導者であり、福音主義の直観主義を拒否し

つつ信仰を個人の心理的感覚から出発させようとする間で葛藤したJ.H.ニューマン(1801-1890)を忘れるわけにはいかない。また、自然神学にもとづいて信仰の促進を目指したギフォード講義自体が、逆にその自然神学的指向故に結果として英国知識人層に不可知論を醸成することに加担したことも言及しておいた方が良からう。

また、正統と異端の関係づけのレトリックとして、カトリックに改宗したG.K.チェスタートン(1874-1936)の『正統とは何か』が参照されている(162-163頁)。しかし、現代の社会状況を見る上で採り上げるべきは、彼が『聖トマス・アクィナス』(1933)で「近代世界は『高利の擁護』を書いたベンサムから始まった」と宣言したことではないだろうか。ポピュリズムを背後から推し進めているのは高邁な理念や思想ではなく、世俗化と大衆化と「欲求の体系としての近代」(ヘーゲル)、つまり功利主義と経済だからである。

最後に、本書によって呼び起こされた50年前の記憶を記しておきたい。評者は「文化人」という言葉がまだ生きていて、その発言が著書や新聞コラムを通じて一般の人々にも影響を与えていた最後の時代を経験している。大学紛争のただ中の1969年の夏休み、予備校の友人達と丸山『日本の思想』(岩波新書)の読書会を何回かかけてやった。大学入学後に受けた丸山による一般教養「政治学」のテキストは『増補版現代政治の思想と行動』(未来社、1964)であった。当時、丸山の文章の語り口のうまさや採り上げるエピソードの適切さに感動すら覚えた。なるほど、知識人とはこういう人のことを言うのか、と。今、著者・森本の著作や講演などで発揮されるその預言者のようなナラティブに、半世紀前に丸山に感じたものと似た感想を抱いている。世俗化が徹底した現代日本で、超少数派でまさしく「真正正銘の異端」であるキリスト教の「新たな正統」としての顕現に、果たしてその力が寄与することができるのであろうか。少なくとも、本文の末尾と「あとがき」の末尾は、それに向けての著者の宣言のように評者には思える。